ところで、総人数で見ると前記の四例にくらべて、二百四十三人は著しく少ない。何故であろうか。猛烈な疫病の流行で、その犠牲となっての減少であろうか。それにしても人口減少の率がひどすぎる。

その頃、辰の年であったのは、宝暦十年、明和九年、天明四年、寛政八年で、その中の明和九年または天明四年の頃が、もっとも食糧に困窮した時期ではなかったか。

またこの時代は、庶民ばかりでなく、藩公までも神仏に祈っていた。それで私は、部落内のあちこちに散在する蛭子様や、お地蔵様などを調べて見た。蛭子様の方は、その大部分が祠がこわれて改修したものが多く、奉祭年次も記されてない。地蔵様の方は、地下と作網代と二か所あり、その台座には次のように文字が刻まれていた。

地下のお地蔵様

（左側面）　天明五巳年建之
（正　面）　一切衆生平等利益
（右側面）　当浦願□□

作網代のお地蔵様

（左側面）　安永四年未
（正　面）　継祖父志
（右側面）　作網代講中
　　木屋宇三蔵

以上探究の結果から考えれば、羽出浦の漁民が、藩方から夫食麦の給付を受けた年号は、安永二辰年か、または天明四辰年の何れかであろうが、軽率にきめるわけにはいかない。また「打ち続く不漁」の原因が、長期にわたる潮流異変か、天候不良が続いたためか、その他の事情によるものか、これを調べる資料も方法も今のところ見つからない。また古文書について研討したいこともあるが、今回はこの位に止めておきたい。

（おわり）

雑記

「限」のつく地名

福岡　佐脇貫一

こんどの旅で日田市を訪れたとき、市内を流れる三隈川（筑後川上流）が、日隈・月隈・星隈の三地域を、その流れによって分画していることを知った。三隈川本流に臨む日隈は亀山城趾、支流花月川に沿う月隈は丸山城趾（永山市政所）、そして三隈・花月両川の合流点近くに星隈山がある。

そこで三隈川の三隈が、日隈・月隈・星隈を指していることはわかったが、「隈」とは一たい何だろう。どんな地形を指すのだろうと私の好奇心は「隈」の字に集中した。

広辞苑によると「隈」は「曲」または「河」で、弯曲して入りこんだ所のことである。また「隈々し」という言葉があるが、これは樹木がひどく繁茂していることで、ひどく薄暗い形状をいう。つまり川が迂曲してつくった山間の土地（山河＝山のくま・山の入りこんだ所）ですね、なるほどの意味もある。

ところで「隈」のつく地名は、北九州地方とくに筑紫といわれた福岡県（筑前・筑後）、佐賀県（肥前）東部にかぎられ、大分県方面（日田市を除く）には少ない。こころみに福岡県地図を開いて見ると、まず福岡市内に七隈・ハノ隈・千隈・雑餉隈・道隈・金隈・月隈などが目につき、福岡県内では筑紫・三井・嘉穂・朝倉の各郡に、西隈・乙隈・横隈・小隈・山隈・今隈・大隈・牛隈・吉隈・日ノ隈・篠隈などがある。また佐賀県東部には鎮西隈・蟹隈・中津隈・鳥隈などが見られる。いずれも山間部を迂曲する河谷に沿う小流域である。

（おわり）